

# JSL カリキュラムの「5つの視点」に基づいた外国人児童生徒への教科指導 ～視点を共有し、わかる授業をめざす～

三重県教育委員会事務局 研修推進課 テーマ研修班 研修員 前田 怜子

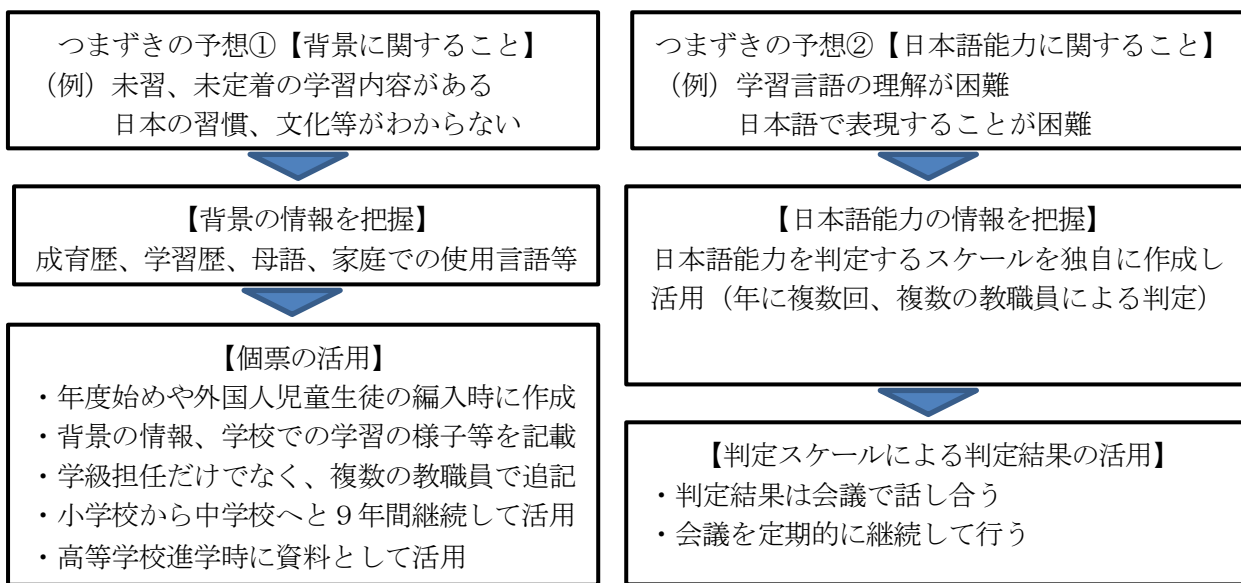
## I 研究の目的

外国人児童生徒の日本語能力等の情報を校内で共有し、JSLカリキュラムの「5つの視点」(資料編【資料1】)に基づく支援を教科指導に取り入れることが、よりわかりやすい授業づくりへとつながることを、先行事例研究及び自らの実践を通して調査し、その成果と課題について考察する。

## II 研究の内容

### 1 外国人児童生徒についての情報共有 ～ どのような情報を把握し、どのように共有するか ～

外国人児童生徒が授業中どのようなことにつまずくかを予想し、必要な情報を考える。



#### ○ 情報共有の利点

- ・様々な立場から見た外国人児童生徒の日本語能力を、教職員間で共有することができる。
- ・個々の外国人児童生徒の日本語能力の伸びや、より重点的に支援を行うべき点が明らかになる。
- ・校内で情報を共有することで、彼らへの支援の方向性を決めたり、見直したりすることができる。

### 2 「日本語能力判定スケール(お試し版)」の作成・実施・改良

- (1) 「日本語能力判定スケール(お試し版)」(資料編【資料2】)の作成にあたって重視したこと
  - ・外国人児童生徒にかかわる全ての教職員にとって負担感が少なく活用しやすいものにする。
  - ・判定した日本語能力に応じて、授業に取り入れる支援を考える目安となるようにする。
- (2) 「日本語能力判定スケール(お試し版)」による判定の実施  
所属校の外国人生徒(2年生4人抽出)を対象に、日本語能力を判定した。

#### 「日本語能力判定スケール(お試し版)」の成果(○)と課題(●)

- 生徒の日本語能力を意識するようになった。
- 日常会話ができて学習内容の理解には至っていないことを再認識した。
- 生徒の日本語能力が相手や環境によって変わることがわかった。

- 判定基準、表現が曖昧。  
(例:ほとんどできる、ゆっくりとした会話等)
- 単元・教科による判定のしづらさがある。
- 授業中に判定を行うには、項目数が多い。

(様式4)

(3) 「日本語能力判定スケール (お試し版)」の改良と判定の実施

日本語レベルを4段階に減らし、判定の目安(日本語の様子、使用場面、文字・表現方法)をつけて改良し「日本語能力判定スケール(お試し版4段階 ver.)」(資料編【資料3】)とした。

「日本語能力判定スケール(お試し版4段階 ver.)」の成果(○)と課題(●)

- 7段階のものよりも早く判定が行えた。
- 判定の目安があるため、判定に迷うことが少なくなった。

- 判定項目内「あいさつ程度」は、判定基準にはなりづらい。

これまで漠然と捉えていた外国人児童生徒の日本語能力を「聞く・話す・読む・書く」と技能別に細かく観察したり、彼らの日本語能力を判定できる場面を改めて見直したりすることができた。これは外国人児童生徒にかかわる全ての教職員にとって、指導・支援の工夫を行っていくうえで役立つものとなる。

### 3 JSLカリキュラムの「5つの視点」に基づく支援の具体例

(1) 指導案例(中学校 英語)(資料編【資料4】)

「5つの視点」に基づく支援を取り入れる場面を具体的に表した指導案例を作成・提案した。

(2) 普段の取組の中にある「5つの視点」に基づく支援の具体例

支援例	5つの視点
○ 授業展開の固定(言葉や絵で提示)	理解支援: 明示する
○ 要点を明示(キーワード色分け、色の固定)	理解支援: 視覚化する
○ 長文を短文に、複文を単文にする	理解支援: 言い換える
○ 具体的な例を示す(活動のデモ)	理解支援: 例示する
○ ルビ (ローマ字、ひらがな)	理解支援: ルビ 自律支援、情意支援
○ 漢字とともに読み方を提示し、声に出す	記憶支援: 音声化する
○ 発表に使う文型を表にする、カード等にして渡す (見本、拡大、ヒントカード)	表現支援: 語彙や文の提示
○ 表現方法を提示(絵や図での表現、選択肢)	表現支援: 表現方法を示す
○ 母語が理解できる場合、母語訳集	自律支援

これらの支援は、一斉指導に取り入れたり、個別にカードを渡したりする等、児童生徒の実態に応じて工夫することができる。児童生徒のつまずきを予想して授業を組み立てる中で、外国人児童生徒に必要な文化的知識や日本語に配慮しながら支援を取り入れていくことが求められる。

## III 成果と課題

### 1 成果

外国人児童生徒にかかわる全ての教職員が一丸となって取組を続けるために、判定スケールや判定会議を活用し、取組を見直しながら組織的に実践を重ねることの重要性を学んだ。

「5つの視点」を取り入れた指導案例を示したり、普段の取組の中にある支援の具体例を整理したりする中で、これまで教職員がわかる授業を行うために工夫してきた取組は、外国人児童生徒にとっての支援にもなり得ることを再確認した。

### 2 課題

外国人児童生徒についての情報、「5つの視点」の共有が、外国人児童生徒にとってわかる授業へとつながることを学んだが、今回自らの実践の中で「共有」を図ることはできなかった。今後校内研修会等で外国人児童生徒についての情報、「5つの視点」を共有することの目的や効果について外国人児童生徒にかかわる全ての教職員と共通理解を図り、教科等の枠を越えた実践へとつなげたい。